



TITLE:

ポスト狩猟採集社会の文化変容--バカ社会における仮面儀礼の受容と転用 (特集 地域研究の前線)

AUTHOR(S):

分藤, 大翼

CITATION:

分藤, 大翼. ポスト狩猟採集社会の文化変容--バカ社会における仮面儀礼の受容と転用 (特集 地域研究の前線). アジア・アフリカ地域研究 2007, 6(2): 489-506

ISSUE DATE:

2007-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/80074>

RIGHT:

ポスト狩猟採集社会の文化変容

— バカ社会における仮面儀礼の受容と転用 —

分 藤 大 翼*

Acculturation of a Post-foraging Society: Acceptance and Transformation of Mask Rituals among the Baka

BUNDO Daisuke*

The Baka are hunter-gatherers living in the tropical rainforests in the western Congo Basin. In the 1950s, the Baka abandoned their nomadic life in the forest and settled, like their Bantu-speaking neighbors, along the roads, adopting cultivation of their own fields. They perform various mask rituals, some of which have probably been introduced from agriculturist societies.

In this paper, I will first describe a rite of passage to join the mask association called *jengi*, the most important and widespread mask performance distributed throughout the Baka region. I will make clear the expected roles of initiates and non-initiates in a *jengi* mask performance. Then, I will analyze the actual behavior of participants in a *jengi* mask performance, based on data obtained from video tapes recorded with an ethnological sampling method, in order to show how the Baka fill the expected roles. Based on these descriptions and analyses, I will show that there is little social pressure, with negative or positive sanctions, to compel an individual to participate and play the expected roles in the performance. Flexibility and arbitrariness, regarded as characteristics of hunter-gatherer social relationships in previous studies, are also confirmed in this study of behavior in the mask performance. I will finally discuss the acceptance, transformation and appropriation of the mask ritual by the Baka.

1. 序 論

1.1 ビグミー系狩猟採集社会の儀礼研究

中央アフリカの熱帯雨林地域に居住するビグミー系狩猟採集民は、¹⁾ 儀式らしい儀式をおこなわない人々だとされてきた。例えば、コンゴ共和国東部に居住するムブティ (Mbuti) ・ピ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2006 年 7 月 31 日受付, 2006 年 11 月 7 日受理

グミーの社会には、モリモ (*molimo*) という歌と踊りをおこなう男性秘密結社があると報告されている [ターンプル 1976; 原子 1984]。しかし、結社への加入儀礼に関する詳しい報告はなされていない。また、コリン・ターンプルはモリモに関して、儀礼 (ritual) と魔術 (magic) とも無縁であり、何にかかわる行事なのかわかりにくいと記している。そして、それは不猟や病、死など「良くないこと」が起こった場合におこなわれるものの、ムプティはその原因を邪術 (sorcery) や妖術 (witch) のせいだとは考えておらず、したがって、モリモは多くの農耕社会のように厄災を払う「儀式」として実施されているわけではないと述べている [ターンプル 1976]。メアリー・ダグラスは、このような研究を受けて、儀式を持たないという事実こそがピグミーの文化の独自性を示す一面だと指摘し、ピグミーを「儀式蔑視派」として分類している [ダグラス 1983]。

中央アフリカ共和国、コンゴ共和国に居住するアカ (Aka)・ピグミーの社会では、衣装で顔や体を覆った踊り手が登場する歌と踊りが実施されており、仮面結社も組織されている [Bahuchet 1992; Lewis 2002]。しかし、結社への加入儀礼は、多少の金品を支払うだけの簡素なものだという。²⁾

これらの報告に対して、筆者は自ら儀礼を受けることによってカメルーン共和国のパカ (Baka)・ピグミーの社会においてジェンギ (*jengi*) という精霊による仮面パフォーマンスと、それを主催する男性秘密結社が存在し、様々な儀式からなる加入儀礼が実施されていることを確認した。

パカ社会でそのような儀礼が実施されるようになった経緯については、文献資料がなく、調査も十分ではないため確かなことは言えない。しかし、仮面結社を伴う儀礼文化は、一般に農耕社会に広く見られるとされており [米山 1994]、アフリカの狩猟採集社会では、仮面の製作や使用がまったく確認されていないとまで言われている [吉田 1992]。これらのことから、パカは農耕社会の文化を受容することで、仮面儀礼を実施するようになったのだと考えられる。³⁾

アフリカで仮面が作られている地域は、西アフリカのギニア、マリからギニア湾一帯とコンゴ盆地を経て東はインド洋岸のモザンビークにいたる、いわゆる赤道アフリカの農耕社会とされている [吉田 1994]。これらの地域では、仮面をかぶる人々は、仮面をかぶることのない人々から区分された独自の集団、すなわち仮面結社を形成している。アフリカの仮面儀礼は、基本的にこうした仮面結社によって営まれているのである [吉田 1994]。

仮面儀礼をおこなう農耕社会では、仮面は葬送儀礼で舞踏を演じるのに用いられたり、結社

-
- 1) 「ピグミー」とは字義通りには「肘からこぶしまでの長さ」ということであり、身長が低いという形質的な特徴を表している。男性の平均身長は 150cm、女性は 140cm 程度である。ピグミーは使用言語によって 10 ほどのグループに分かれている。
 - 2) アカ社会の研究をおこなっている北西功一氏 (山口大学助教授) の私信による。
 - 3) パカの近隣に暮らす農耕諸民族が、現在パカと同様の儀礼文化を保持しているという報告はない。

への加入儀礼において、加入者に結社の規律や道徳を教え込む際に用いられる。また、仮面儀礼を主催する秘密結社は、結社員と非結社員との間に「支配」と「被支配」という「力」関係の構造を有しており、共同体における秩序の形成に寄与しているとされている。社会に秩序があるということは、成員の行為が勝手気ままなものだけではなく、社会あるいは他者から寄せられる期待、役割を果たすものでもあるということである [谷田部 2000]。そして、仮面儀礼をおこなう多くの社会には、一般に行為者を期待に同調させるサンクション（社会的な賞罰）が設けられている。しかし、これらの仮面儀礼の実施にともなう現象は、ピグミー系狩猟採集社会には見られないとされてきたものである。

例えば、コリン・ターンプルは「ピグミーは一定のルールにはあまり拘束されず、全ての者が多かれ少なかれ従うことになっている一般的な行動パターンはあるが、それとかなり融通がきくものだ」[ターンプル 1976: 69] と述べている。また、市川 [1991: 24] は集団を構成する個人の社会的な差異は、性別と長幼にもとづく区分しないと指摘し、「個々の成員は原則的に対等である。他人に対して威信をもとうとしたり、あるいは単に責任をとろうとするだけで、厳しい非難や嘲笑の対象となる。物質的であろうと、社会的あるいは精神的であろうと、出すぎた行為はすべてネガティブな評価を受ける」と述べている。従来、ピグミー系狩猟採集社会の研究では、融通無碍な、そして平等な社会性が明らかにされてきたのである。「儀式蔑視派」とまで言われたピグミー系狩猟採集社会が典型的な儀礼文化を受容しているとすれば、それはどのようなものなのか。仮面儀礼の実施にともなう生じる社会的な地位の不均衡、規制、期待や役割に人々はどのように対処しているのだろうか。本研究の目的は、仮面結社への加入儀礼と結社が主催する仮面パフォーマンスにおける参加者の言動を記述、分析することによって、バカ社会における仮面儀礼の受容と転用の様態を明らかにすることである。

1.2 バカ・ピグミー社会の現状

バカはカメルーン共和国とコンゴ共和国北部に分布しており、ウバンギアン系の言語を使用している [Bahuchet 1992]。人口は推定 25,000 人程度である [Hewlett 1996]。

本稿の調査は、カメルーン共和国東部州のオ・ニヨン (Haut-Nyong) 県でおこなった。⁴⁾ オ・ニヨン県最大の町であるアボン・バン (Abong Mbang) から南東に延びる道路沿いで、バカが居住している最初の集落はジボット (Zibot) である (図 1)。ジボットからンゴイラの南 4km にあるマバン (Maban) の間には、合計 32 のバカの集落がある。また、ネメヨン (Néméyon) という村からは東に向かう道路があり、その地域には 13 の集落がある。これら

4) 本研究の調査期間は、1996 年 11 月から 1997 年 3 月、1999 年 1 月から 12 月、2002 年の 1 月～2 月である。ディマコ集落における滞在期間は、計 15 ヶ月間である。調査地域は熱帯雨林気候で、年間降水量は 1,600mm から 1,800mm、平均気温は摂氏 24 度から 25 度である [林 2000]。季節は 4 つに分かれており、4 月～5 月が小雨季、6 月～8 月が小乾季、9 月～11 月が大雨季、そして 12 月～3 月が大乾季となっている。

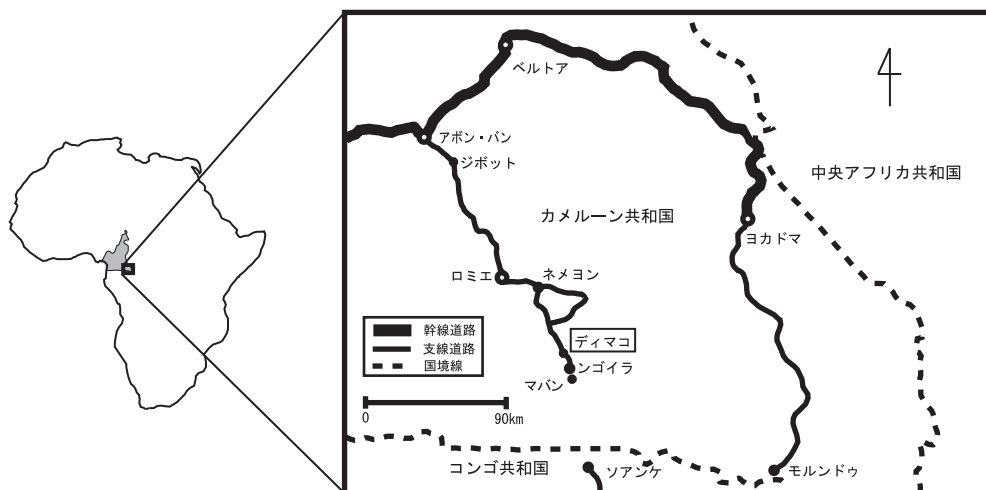


図1 カメルーン共和国と東部州の調査地域

の地域では、数キロメートルごとに農耕民の村⁵⁾ とバカの村が分布している。本稿は、これらの村を対象におこなった広域調査と、ディマコ (Dimako) 集落でおこなった長期調査にもとづいている。⁶⁾ 近隣にはバントゥー系農耕民のジェム (Njem) が居住している。

先行研究が対象としてきたピグミー系狩猟採集社会は、少なくとも一年のうち数ヵ月を森の中で過ごす「遊動生活」(nomadic movement)を基礎としていた。しかし、調査地のバカは現在では定住集落を形成して暮らしている。また、小規模ながら農耕を始めており、⁷⁾ その一方で、かつておこなっていた集団狩は全く見られなくなっている [Althabe 1965]。定住化政策が施行される 1950 年代以前には、バカも遊動生活をしていたとされることから、現在は生活様式の移行に伴う文化変容の過程にあると考えられる。

生業において農耕化が進行しているとともに、葬送儀礼の様式などにも農耕社会の文化の模倣が見られる。このような文化状況において、今なお狩猟採集社会的な文化的特性が見られるとしたら、それはどのようなものなのか。バカ社会が農耕社会の文化をいかに受容し、転用しているのかが明らかになれば、ポスト狩猟採集社会における文化変容の研究として重要な成果となるだろう。

5) 主なグループは、マカ (Maka), バジユエ (Bajue), ンジメ (Nzime), ジェム (Njem) である。

6) ディマコの人口は 116 名ほどである。バカの集落あたりの平均人口は 50 名ほどと推測されているため [都留 1996], ディマコは比較的規模の大きな集落だといえる。

7) デイマコでは、ほとんどの世帯が集落から数キロメートルの範囲に小規模な畑を持っており、主食となるプランテン・バナナやキャッサバを栽培している。また、少数ではあるが、換金作物であるカカオを栽培している者もいる [Kitanishi 2003].

2. 音楽実践と仮面儀礼

2.1 音楽実践と仮面パフォーマンスの概要

バカ語には「べ」(*be*)という「音楽」を意味する名詞がある [Brisson and Boursier 1978]. バカが集団で実践する「べ」では、他のピグミーのグループと同様に、旋律楽器が用いられることはなく、多くの場合、楽器は太鼓のみである。主に女性が歌う歌には、掛け声のようなものはあるが、歌詞といえるようなものはない。ピグミーの歌は、特有の裏声（ヨーデル）によって、一定の長さの旋律が繰り返し歌われるという特徴を持っている。歌には2つのフェーズがあり、複数の旋律が同時に歌われるポリフォニーと、独唱とそれへの応答というパターンを持つものがある [Arom 1977; 澤田 1991].

「べ」は、日没後に太鼓の音とともに始まる。⁸⁾ 太鼓は、初めのうちは子どもたちによって、断続的に決まったリズムもなく叩かれる。しばらくすると、青年男性が交代し、その晩におこなわれる「べ」のリズムを、力強く継続して叩き始める。そして、女性たちが参集し歌い始めると、本格的に「べ」が始まる。

このようにして始まる「べ」には、扮装した踊り手が登場するものと、しないものがある。⁹⁾ 本稿で取り上げる前者の「べ」に登場する特別な踊り手のことを、バカ語ではモコンディ (*mokondi*) という。¹⁰⁾ モコンディの核心は、踊り手が扮装によって匿名化されているということである。そうすることによって、見知った「誰か」ではなく、森から訪れた「何者か」という雰囲気を出すのである。この扮装は顔を覆い踊り手を匿名化するために着用されていることから「仮面」と見なしうるものである。

モコンディの衣装やパフォーマンス、歌の旋律や太鼓のリズムなどのアイデアは、青年期以降の男性が夢や森などで出会った「精霊」¹¹⁾ から教わるといわれている。そして、アイデアを得た男性が、既婚者であれば妻に、未婚者であれば母親などに歌を教え、年少者に衣装作りを指示し、他の男性に踊りを教え、自ら太鼓を叩くことによって新しい「べ」が実施されるようになる。このようにして、「べ」の主催者となった男性は精霊の「父」、パートナーの女性は精霊の「母」と呼ばれるようになる。

8) 「べ」は行事として決められた日時に実施されるものではない。

9) 1999年の調査時にディマコ集落では、2つのタイプの「べ」が8種類ずつ観察され、これらの「べ」が平均すると2晩に1度くらいは種類をかえながらおこなわれていた [Bundo 2001]. 特別な踊り手が登場しない「べ」は、主に子どもと女性によっておこなわれる遊戯的なものであり、参加者は輪になって行進したり、輪の中で次々と踊り手を交代させたりしながら歌い踊る。ムプティやエフェの歌と踊りは、このタイプのものであり、本稿で取り上げるような扮装した踊り手が登場するものは実施されていない。

10) この語は、バントゥー系の *mokonji* (主人) という言葉に由来している可能性がある。また、バントゥー系のアカ（・ピグミー）語でも、衣装を付けた踊り手のことを *mokondi* という。

11) バカ語で *me* と呼ばれる [分藤 2005].

精霊の父となった男性は、バンガ (*banga*) と呼ばれる小屋を自宅の裏などに建て、そこで加入儀礼を実施して、男性による秘密結社を組織する。そして、より多くの結社員によって「ベ」が円滑に実施されるように取り計らう。この一連のおこないによって、精霊の父は、精霊を「守護」する者と見なされるようになる。

上記のようなケースに加えて、古い「ベ」の中には、精霊の父や母が世襲されているものもある。また、加入儀礼には、他の集落からもバカが参集し協同して実施するものもある。本稿で取り上げるジェンギ (*jengi*) という精霊の加入儀礼は、この古い「ベ」のケースに該当している。

2.2 精霊ジェンギ

バカの儀礼、あるいは「ベ」に関する先行研究において、ジェンギは必ずといっていいほど取り上げられてきた [Higgins 1985; Joiris 1993, 1996, 1998; 都留 1996, 1998; 分藤 2001]。その理由の一つは、ジェンギの「ベ」が最も古くから広い範囲で実施されてきたとされているからである。ジェンギの「ベ」は、アカの社会でも実施されていることから、バカとアカが言語的に分岐した 200 年以上前から実施されている可能性がある [Bahuchet 1992]。「ベ」に精通している数名の成人男性に、「ベ」を古いものから順に挙げてもらったところ、ジェンギは必ず一番初めに挙げられた。そして、どのくらい古いのかを聞くと、誰もが「わからない。民話と同じくらい昔のことだろう」と答えた。¹²⁾

広域調査では、ジェンギが知られていない集落は一つもなかった。そして、ジェンギの「ベ」は、45 の集落のうち 27 の集落で実際に実施されていることが分かった。また、先行研究でもジェンギが知られていないバカの居住地域は報告されていない。バカの人々の間では、ジェンギは他のモコンディとは比較にならないほど重要なものだといわれている。このことは、結社の加入儀礼について、「ジェンギのものは大きくて、他のものはちっぽけなものだ」と語られることにも表れている。

「ベ」の場に登場するジェンギはラフィアヤシの繊維で作られた衣装で全身を覆っている。ジェンギのパフォーマンスの特徴は、直立した姿勢で回転することによって、衣装を円錐状に広がるようになびかせ、その姿形の大きさを強調するところにある (写真 1)。また、頭の位置に着けている衣装を高々と持ち上げ、大きさを誇示することもある。さらに、ジェンギは人を殺すほどの危険な力を持っているとみなされているため、ジェンギが女性たちに近づくと、結社員が縦列になって、前の人の肩や腰をつかんでバリアーを作り、ジェンギの行く手を阻んで女性を守る行動をとる。そして、ジェンギは結社員の結束を確かめるように、何度も激しくバリアーの列にぶつかる。それに対して、結社員たちも、奇声をあげて応じる。このように

12) バカ語でリカノ (*likano*) と呼ぶ民話には、ジェンギにまつわるものが多数ある。



写真1 ジェンギの登場する歌と踊りの様子
(左に写っているのがジェンギ、中央は筆者)

ジェンギの「ベ」は結社員の男性とジェンギとの間の絶えまない相互行為によって進行する。

本節で述べたジェンギの特徴や「ベ」における結社員の役割に対する認識は、ジェンギ結社への加入儀礼を通じて強化され、習得されている。

2.3 ジェンギ結社への加入儀礼

ほとんどのバカの男性は少年期にジェンギ結社への加入儀礼を受ける。言葉の上でも結社員と非結社員は区別されており、前者はンボニ (*mboni*)、後者はモボコ (*moboko*) と呼ばれている。¹³⁾ またンボニという言葉は、加入儀礼を受けている最中の者に対しても使われる。バカ社会最大の儀礼であるジェンギ結社への加入儀礼は4日間にわたっておこなわれる(図2)。¹⁴⁾

初日には、「ベ」が徹夜でおこなわれる。そして、その場で新規の加入者(以下では「ンボニ」と表記する)が整列させられ、ジェンギが一人一人の前にやって来て加入者を見る「認知する儀式」(図2)がおこなわれる。

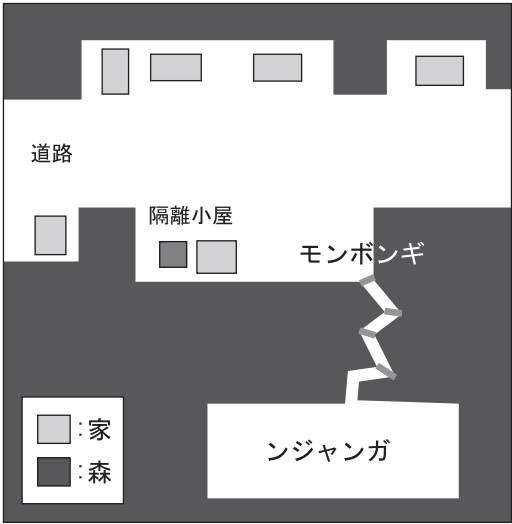
2日目の昼頃、ンボニは集落にある小屋に集められ(図3)、女性たちによって髪型を整えられ、赤色のンゲレ (*ngele*) と呼ばれる植物性の顔料とアブラヤシからとった油を全身に塗られ、ケンベ (*kembe*) と呼ばれる白色の顔料で顔に模様を描かれる。ンボニの身支度が整うと「ベ」が始まり、枝葉を持った男たちに囲まれてジェンギが登場する。そして、ンボニたちが隔離されている小屋の前に現れ、ンボニを大勢の人々の待つ中へといざなう。そして、ンボ

13) ただし、日常生活において、両者の間で目立った行動の違いは見られない。

14) 1999年11月17日～20日にかけて実施された。また、2004年に観察した加入儀礼も同様の形式が踏襲されていた。

4 日目		← 3 日目		← 2 日目		← 1 日目	
昼		夜	昼	夜	昼	夜	夜
・ 厄払いの狩獵			・ 対面の儀式	・ ジェンギをサポートする練習	・ 死と再生の儀式	・ 加入者が小屋に隔離される	・ ジェンギが加入者を認知する儀式
・ 金品の授受			・ 「ベ」	・ 血盟の儀式	・ 加入者がンジャンガに入る	・ 徹夜の「ベ」	・ 「ベ」
・ 植樹式			・ ジェンギをサポートする練習	・ 対面の儀式			
・ 加入証（首飾り）の授与							
・ 行水							

図 2 ジェンギ結社の加入儀礼の過程



モンボンギ（結界）と少年

図 3 集落とンジャンガの模式図

ニたちは太鼓の音と女性たちの歌声に押し流されるようにしてモンボンギ (mombongi) と呼ばれる結界をくぐり、ジェンギの場所であるンジャンガ (njanga) に入る (図 3)。¹⁵⁾

この後、20cm 程の棒がンボニの数だけ女たちのもとに運ばれる。その棒は先の部分がとがらせてあり、その部分には赤い顔料が塗られている。それはンボニの血であり、ンジャンガに入ったンボニが、ジェンギによって「殺された」ことの証として女性たちに提示されるのである。

15) ンジャンガは、集落から森に向かって数十メートルにわたって小道を整備し、その先の森を広く刈り払って作られた場所である。ジェンギは森の奥からンジャンガにやって来て、「ベ」の実施期間中、集落付近に滞在するとされている。

る。そして、ンボニを甦らせるための儀式がンジャンガ側の結社員の男たちと集落側の女たちとの間でおこなわれる（「死と再生の儀式」、図 2）。

男女の間で拍手や発声、歌唱などが交互におこなわれ、女性側は「ンボニを甦らせ、集落にかえすように」ジェンギをなだめる調子で呼びかけ、一方の男性（ジェンギ）側は、「なんだ？ わからない」「私はこの場を去る」といった調子で、女性側の呼びかけにとりあわない口調で応答する。このやりとりは、男性側の「しばらくの後、ンボニたちは集落にかえるだろう」という宣言をもって終了する。

その後、ンジャンガではジェンギがンボニたちの前にやって来て、自らの衣装を両手で押し開き、その顔をンボニたちにさらす。ジェンギは手に短刀を持っており、周囲の男たちも、時に山刀をンボニの体にあて、脅すような調子で結社員の心得を繰り返す。心得とは、「ンボニとなった男性は、ジェンギの秘密を守り、ジェンギの『ベ』を守るかぎりにおいて、ジェンギによってあらゆる危険や病から救われ、逆にこれらのことを守らなければ、ジェンギによって殺される」というものである。

この「対面の儀式」（図 2）の後、年長のンボニがジェンギの差し出した手を握り、双方の手の甲に傷が付けられる。そして、結社員の男性がプランテン・バナナのかけらに傷口の血をつけて、「これがジェンギだ、口外するな！」と言って、ンボニたちに食べさせる（「血盟の儀式」、図 2）。この後、ンボニたちは結社員の心得を守るよう念を押された上で集落にかえされ、すぐさま隔離小屋に入れられる。

晩になって「ベ」が始まると、ンボニはジェンギのパフォーマンスをサポートする練習をおこなう（図 2）。これが先述した結社員の心得の一つである、「ジェンギの『ベ』を守る」という行為である。それは、踊るジェンギを囲んで奇声をあげ、口笛を吹くなどしてパフォーマンスを盛り立てるというものである。また、ジェンギが女性に近づくの列になって遮り、声をあげてジェンギを制する練習も何度もおこなう。「ベ」が終わると、ンボニたちは隔離小屋へとかえされる。

3 日目は、日中にンジャンガで「対面の儀式」（図 2）が繰り返される。そして、晩に「ベ」が始まると、ンボニは昨晚同様にジェンギのパフォーマンスをサポートする練習をおこない、終了後は隔離小屋で眠る。

4 日目、ンボニはジェンギと結社員に連れられて近くの小川に向かい、体に塗っていた顔料や油を洗い流す（「行水」、図 2）。その後、集落に戻り再びンジャンガに入る。そこで結社員たちはンボニたちのために、マンガ（*manga*）と呼ばれる首飾りを作り、¹⁶⁾ 加入した証としてンボニ全員に配る（「加入証の授与」、図 2）。その後、ンジャンガの一面に儀礼に関与した全

16) マンガとはダイカー類の角に炭の粉を油で練ったものを詰め、その中に所有者となるンボニの髪と、両手両足の爪を少しずつ削り取って詰め込んだものである。マンガは幸運をもたらす、薬にもなるという。

ての男たちが集まり、地面を掘り、そこに全結社員から少しずつ切り取った髪の毛が収められる。そして、一本の細長い木を全員で握り、挿し木として穴に突き立て、根元をしっかりと踏み固める。この木はやがて大木に成長するという（「植樹式」、図 2）。

この後、儀礼の執行者に報酬を支払う「金品の授受」（図 2）がおこなわれ、その支払いをもって加入儀礼は終了となる。その後、ンボニは弓矢でねずみなどを狩ることによって厄払い、狩猟者として儀式を締めくくる（「厄払いの狩猟」、図 2）。その後数日間にわたって夜間に「ベ」がおこなわれ、ンボニは結社員として「ベ」に参加する。

以上の加入儀礼の要点は、第一に、この儀礼が他のアフリカ狩猟採集社会には見られないような多様な儀式によって構成されているということ（図 2）。第二に、この儀礼が典型的な通過儀礼の形式（schéma des rites de passage）[ファン・ヘネップ 1977]をとっているということである。このような通過儀礼は内容や式次第にかかわらず、儀礼を受けた者の地位・役割を共同体の成員の間で認知し、強化するという側面を持っている。この点を捉えて、廣松 [1989: 195] は「儀礼的諸行為は、役割理論の視座からとらえ返すとき、統一的なパースペクティブのもとに配位することができる」と述べている。

実際にジェンギの儀礼においても、加入者は通過儀礼を通じて「ベ」において果たすべき役割を繰り返し練習させられ、それらが上手にできるようになってはじめて、一人前の結社員として認められている。また、非結社員である女性も儀礼に参加することで、ジェンギの「ベ」において力強く歌うという役割を果たさなければならないことが確認されているのである。

3. ジェンギの音楽実践における参加者の言動

3.1 音楽実践における役割遂行の実態

儀礼において確認され、付与される役割を、バカの人々は実際にどの程度遂行しているのだろうか。農耕社会における儀礼の場合と同様に、儀礼を受けておこなわれる集団的行為において、その役割を忠実に果たしているのだろうか。また、役割を果たしていない場合は、どのようなサンクションが科せられているのだろうか。この点を検討することによって、バカ社会がどのように外来の文化を受容しているのかを明らかにする。

本節では、儀礼を受けて実施されているジェンギの「ベ」を対象に、参加者の言動を分析する。そのために一回の「ベ」を取り上げて、その始まりから終わりまでの間に、男性であれば、どのくらいの時間にわたってジェンギの踊りをサポートしているのか、あるいは女性であれば、どのくらいの時間にわたって歌っているのかということを行動学的なデータの分析から明らかにする。

3.2 分析方法

分析をおこなうデータは、1999 年 6 月 3 日に実施されたジェンギの「ベ」において収集し

たものである。¹⁷⁾ ジェンギの登場から「べ」の終了までの間、暗視のできる赤外線ライト付きのビデオカメラを使って参加者の行動を記録した。記録の方法は、一分ごとに参加者全員の行動が特定できるように録画をするというもの（毎分の走査サンプリング法）である。実際の録画時間は午後 8 時 23 分から 10 時 40 分までの 138 分間であった。途中 8 分間にわたってジェンギが参加者を攪乱するパフォーマンスをおこなったり、2 度録画を失敗したため、計 10 回分が「記録なし」となった。その結果、対象者一人あたりの記録回数は 128 回となっている。3.3 からの記述は、対象者が 128 回のうち、どのような行動をどの程度の割合でとっていたのかを明らかにするものである。

対象者は、「べ」の参加者の中から無作為抽出法によって性・世代ごとに各 4 名選択した。¹⁸⁾ 世代の分類は、推定年齢 5 歳～10 歳を幼年期、11 歳から第二次性徴までを少年期、第二次性徴から結婚子どもを持つまでの時期を青年期、それ以降の時期を成人期とした。¹⁹⁾

分析方法は、はじめに男性は 7 種類、女性は 6 種類の行動項目を設定し、記録資料（ビデオ）を繰り返し視聴し、対象者の一分ごとの行動を特定し、各行動項目にポイントを加えた。最終的に、世代ごとにポイントを集計し、総ポイント数 512(128×4 名)に対する、各行動項目のポイント数の割合を算出しパーセントに換算した。この分析によって、各性・世代が、「べ」の開始から終了までの間に、どの行動をどれだけの割合でとっていたのかを明らかにした。

3.3 男性の役割遂行

ジェンギの「べ」において男性に期待される役割は、「太鼓」を叩くということ、ジェンギを囲み衣装を整えたり、奇声や口笛によってパフォーマンスを「サポート」すること、そして、ジェンギが女性に近づくのを防ぐために、縦列になり「バリアー」を築くという 3 つである。

世代によって担当している役割は異なるものの、これら 3 つの行動をあわせた割合は、幼年期が 49%、少年期が 58%、青年期が 52%、成人期が 47%であった（図 4）。この分析からは、男性は「べ」のほぼ半分の時間において役割を遂行しているものの、あとの半分の時間では役割を遂行していないことが明らかになった。つまり結社員であっても終始にわたって役割

17) 1999 年の一年間の調査期間中にジェンギの「べ」が実施された回数は計 18 回であった。

18) 無作為抽出がおこなえるウェブサイトを利用した〈<http://homepage1.nifty.com/nurse/ob/syafuru.htm>〉(2003 年 8 月)。

19) この行動の分析では、乳児期と老年期、また幼年期の少女は対象から外している。その理由は、乳児の場合は、成人期や青年期の女性に連れられて参加することが多いものの、乳児自身の行動は特定することが難しいためである。老年期については、参加者がいなかったために対象にできなかった。幼年期の少女については、参加者が少ないうえに、年長者の陰になってしまうことが多く、観察が困難であるために対象から外した。また、本稿は結社員の行動に注目するため、幼年期の男子は結社員になっている者に限定した。まだ加入儀礼を受けていない幼年期の男子は、母親など女性たちと一緒に「べ」に参加する。

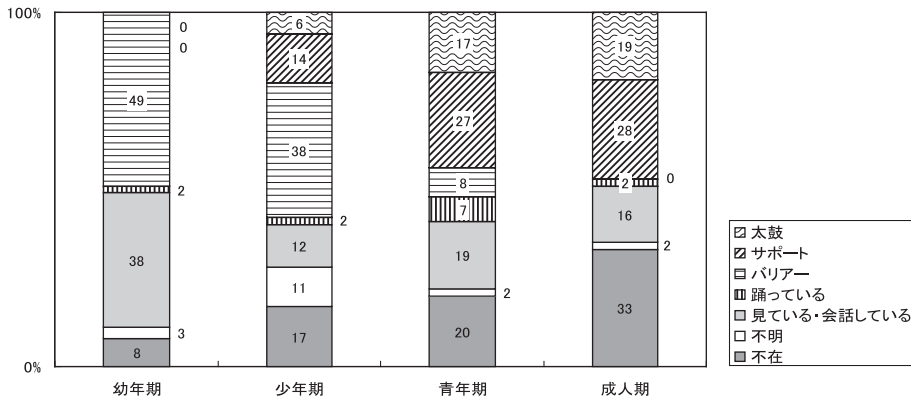


図 4 ジェンギの「べ」における世代別の行動（男性）

注）対象者数は各世代 4 名ずつ。グラフ上の数値は、「べ」の開始から終了までの間に、各項目の行動をとっていた割合をパーセントで示している。

を遂行しているわけではないのである。

「不在」という項目は「べ」の場にいらないことを表している（図 4）。これは役割の不履行の最たるものである。しかし、この行動は「べ」の序盤や終盤において、全ての世代に共通して見られるものである。つまり、結社員であっても「べ」の序盤を通じて徐々に参集し、終盤にかけては「べ」の場を去っており、終始にわたってジェンギのパフォーマンスをサポートしているわけではないのである。

3.4 女性の役割遂行

「べ」において女性に期待される役割は「歌う」ことである。歌っている割合を世代順に検討すると、世代を追うごとに割合が高くなっており、「不在」の割合は世代を追うごとに低くなっている（図 5）。しかし、「歌う」という役割を遂行している割合は、少女期が 2%、青年期が 7%、成人期でも 18%しかない（図 5）。つまり、女性は「べ」が実施されている間、わずかな時間しか歌っておらず、ほとんどの時間を「見ている・会話している」といった本来期待された役割から逸脱した行動をとっている。また、男性の場合と同様に参加者は増減しており、「べ」の最中に場を出入りする者も少なくない。

3.5 まとめ

本節でおこなった分析から、参加者がどのような役割をどれだけ遂行しているのかが具体的に明らかになった。またその一方で、役割から逸脱した行動も高い割合でとっていることが明らかになった。「見ている・会話している」という行動は、「べ」において果たすべき役割から逸脱している。また、「不在」という項目の行動は、「べ」の成り立ちを妨げるものですらある。しかし実際に、全ての性・世代の者がこれらの項目の行動を高い割合でとっているのである。

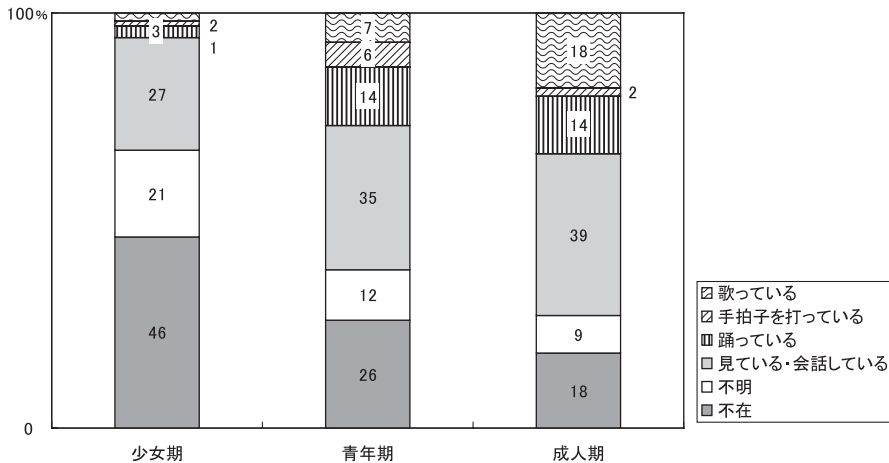


図5 ジェンギの「べ」における世代別の行動（女性）

注）対象者数は各世代4名ずつ。グラフ上の数値は、「べ」の開始から終了までの間に、各項目の行動をとっていた割合をパーセントで示している。

役割の遂行はしばしば不十分なものとなり、「べ」が成立しなくなることがある。そもそも毎回の「べ」は、参加者が少なくなってきたところで終了しているのである。また、参加者の数が少ないために、「べ」が低調なまま、短い時間で終わることもある。さらには、予定されていた「べ」が中止になることすらある。

次節では、全ての性・世代に見られる、「べ」への「不参加」という現象と、参加しているとしても役割を遂行しない「非関与」という行動について検討する。そして、役割を遂行する者と遂行しない者との間で、どのような相互行為がおこなわれているのかを事例を挙げて検討する。

4. 不参加・非関与への対応

ジェンギの「べ」を実施するためには、大勢の男性の協力が不可欠である。集落のほとんどの男性はジェンギ結社の成員であり、結社員には「べ」に参加し適切な役割を果たすことが強く求められている。にもかかわらず、男性の参加者が少ないために、「べ」が短い時間で終了してしまうことが度々起こる。

「不参加の事例1」

「べ」の開始前に、ジェンギが集落の家々を回り人々に参加を要求した。しかし、太鼓が叩かれ始めても人が集まらなかったため、ジェンギが再度集落を回るという事態になった。特に青年期以降の男性が少なく、参加していた老年期の男性が「男はどこだ！ 子ども

ばかりではないか！ 出てきて一緒に『ベ』をやれ！」と叫ぶ一幕もあった。しかし結局十分な人数が集まらず、閑散とした状況のうちに「ベ」は終了した。理由は“Awa jio. Wa mokoe.”「寒いから。みんな疲れているから」とのことだった。

次に、予定されていた「ベ」が実施されなかった事例を紹介する。これは、不参加の極端な例であるといえる。このような事態が1999年の調査時には3度起こった。²⁰⁾

「不参加の事例2」

前日の晩におこなわれた「ベ」の終了時に、「明朝にまたおこなう」ということがジェンギの要求として集落の人々に告げられた。翌朝ジェンギの到来を告げる音が鳴らされたが、人が集まる気配はなく、太鼓も叩かれなかった。しばらくして、ンジャンガにやって来たジェンギの父に、「今朝『ベ』をやると言ってなかったか？」と聞いたところ、彼は笑って“Vraiment, wa la la dadi.”「全くだ（フランス語）、みんなすっかり寝てしまっていたなあ」といった。

この事例では、「ベ」の開催がジェンギの要求として告げられていたにもかかわらず、誰一人として参加しなかったために、「ベ」が実施されないという事態になってしまっている。次は、「ベ」の場に参加しているものの、役割を遂行しない「非関与」の事例である。

「非関与の事例」

「ベ」の開始からしばらくの間、青年と少年が太鼓を担当していた。この二人の太鼓は明らかに弱々しいもので、女性の歌声も高まらず低調な状態が続いた。この時、「ベ」の場には太鼓の名手である成人男性が数名いた。しかし彼らは、ジェンギの傍で踊ったり、煙草を吸いながら談笑するなどして、積極的に「ベ」に関わろうとしなかった。

そのうち、成人男性 A が、しびれを切らしたように、成人男性 B に少年と代わるようにいった。この要求をした A も太鼓の名手なのだが、なぜか B に太鼓を叩くよう依頼した。B はすぐには請け合わず、何度か請われた後、少年と交代した。しかし、もう一方の青年の太鼓が弱いために、「ベ」は盛り上がらなかった。場には太鼓の名手である成人男性 C と D がいた。しかし彼らは、この時は太鼓を叩く気配を見せなかった。しばらくして、誰に請われることもなく C が青年と交代し、明らかに「ベ」は盛り上がった。D は最後まで場に残っていたものの、結局太鼓を叩くことはなかった。

20) 2月2日、5月31日、6月4日の計3回。

このように、名手と認められ、その自覚もあるはずの者がなかなか太鼓を担当しないことがある。そして、そのような時の彼らの様子は、遠慮しているわけでも拒否しているわけでもなく平然としている。彼らが太鼓を叩けば「べ」が盛り上がることは明らかであるにもかかわらず、低調な状態が続いても全く気にする様子を見せない。そして、周りの者も、太鼓を叩こうとしない者に対して「なぜ叩かないのか！」などと問いつめるようなことはしない。実際に周囲の者がとった行動は、その内の誰かが代わりに太鼓を叩くということであった。

「べ」の成立や継続を妨げる不参加や非関与（役割の不履行）に対しては、様々な呼びかけがなされる。男性が女性に対して、「もっと力強く歌え！」と要求することもあれば、女性の間で、座っている女性に対して「立って歌いなさい！」と言うこともある。また、女性が男性に対して「もっとしっかり太鼓を叩け！」と要求することもある。しかし、いずれの場合も、そのように言われた者は要求に従うこともあれば、従わないこともある。そして、どちらにしても、その態度は実に淡々としている。要求する側は、その要求が受け入れられなかった場合には、依頼を繰り返すことはできても、決して強要することはできないのである。

このような認識は、ジェンギに対しても適用されている。ジェンギの「べ」に人が集まらなかったことについて、参加していた男性に「ジェンギは怒らないのか」と聞いたところ、その男性は怪訝な表情をして「疲れて家で休んでいる人を怒ることはない」と言った。

本節における事例の検討から、「べ」が首尾良く進行しない原因が特定の個人に帰せられることがないということ、また、「べ」が不首尾に終わったとしても共同体に厄災が及ぶという語りがないということが分かった。つまり、加入儀礼において役割が課せられているはずの「べ」という社会的相互行為において、個人に対しても共同体に対しても、特段のサンクションが付与されていないのである。

5. 結 論

本稿の目的は、農耕の開始や定住化といった生活様式の変容にともなって、ポスト狩猟採集社会の様相を呈しているバカ社会の文化変容の実態を解明することであった。その出発点として、バカ社会が農耕社会に由来する仮面儀礼を受容している点に着目し、仮面結社への加入儀礼に見られる形式性と、実際の仮面パフォーマンスにおける形式から逸脱する人々の言動を対比的に分析、記述した。

つまり、まずこれまで報告されたことのなかった仮面結社への加入儀礼の実態について記述し、それが農耕社会で実施されているような形式化されたものであり、結社員や非結社員がそれぞれに果たすべき役割が確認され習得される場となっていることを明らかにした。そこで問題となるのは、第一に、バカ社会が農耕社会と同様の儀礼文化を受容しているとすれば、儀礼において課せられた役割を「べ」において忠実に果たしているのではないかということ、第二

に、期待どおりに役割を果たしていないとしたら、その場合には何らかのサンクションが科せられているのではないかということである。

第一の点を検証するためにおこなったのが、「ベ」における参加者の行動分析であった（第3節）。ビデオカメラによる記録映像を行動学的に分析した結果、バカの人々は、儀礼を通じて課せられた役割を遂行する一方で、役割を逸脱した行動も高い割合でとっていることが明らかになった。そこで次に、このような役割の不履行に対してサンクションが科せられているのかどうかを検討した。

第4節の事例の検討を通じて明らかになったことは、役割が遂行されなかった場合も、その原因が一個人に帰されることはなく、また、共同体への厄災が起こるといった言説も聞かれないということである。つまり、特段のサンクションが設けられていないのである。サンクションによって社会秩序の維持をはかるのが農耕社会における仮面儀礼の意義であるとするれば、サンクションがないということは、バカ社会が農耕社会由来の儀礼文化をそのままに受容しているわけではないことを証している。

バカの人々は、ジェンギ結社への加入儀礼のような典型的な儀礼文化を受容することで、形式的には地位や役割を発現させながらも、その加入儀礼を受けておこなわれる「ベ」においては、儀礼によって課せられた役割に縛られない言動をとっている。そして、共同体の成員を役割に縛りつけず、役割から逸脱する者に対してサンクションを設けないことによって、「ベ」をより闊達なものにしている。つまり、バカの人々は、受容した儀礼を共同体の秩序の形成や維持に役立てるのではなく、「ベ」の「演出」として転用することで、「ベ」をよりダイナミックな社会的相互行為にしているのである。

バカの人々は加入儀礼の形式性と「ベ」における行動の恣意性の間で生じている矛盾を保持し、「ベ」のパフォーマンスを演出する装置として仮面儀礼を活用している。つまり、バカ社会は先行研究において指摘されてきたピグミー系狩猟採集社会の融通無碍な特性を、仮面儀礼を受容してなお有しているということである。あるいは、儀礼文化を受容しているからこそ、その特徴がいつそう際だって発現しているとも考えられる。儀式らしい儀式をおこなわないとされてきたピグミー系狩猟採集民であるバカは、儀式らしい儀式をおこなう農耕社会の仮面儀礼の受容を通じて、農耕社会と、そして狩猟採集社会とも異なる文化、すなわちポスト狩猟採集社会の文化を形成しているのである。

謝 辞

本稿は2004年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文を大幅に短縮し、加筆修正したものである。本稿のもととなる調査は、科学研究費補助金を受けておこなわれた。貴重な機会を与えて下さった研究代表者の寺嶋秀明教授（神戸学院大学人文学部）、市川光雄教授（京都大学大学

院アジア・アフリカ地域研究研究科), 竹内潔助教授(富山大学人文学部)に記して謝意を表します。

論文の執筆にあたっては、市川光雄教授、木村大治助教授(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)にご指導をいただいた。また、澤田昌人教授(京都精華大学人文学部)、菅原和孝教授(京都大学大学院人間・環境学研究科)、石井美保氏(一橋大学専任講師)をはじめとして多くの方々から貴重な助言をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

引用文献

- Althabe, G. 1965. Changements sociaux chez les Pygmées Baka de l'Est-Cameroun, *Cahiers d'Etudes Africaines* 5 (20): 561-592.
- Arom, S. 1977/1990. Liner Notes to the Music Disc, Cameroon: Baka Pygmy Music, AUIDIS-UNESCO, D8029.
- Bahuchet, S. 1992. *Dans la forêt d'Afrique centrale les Pygmées Aka et Baka*. Paris: PEETERS-SELAF.
- Brisson, R. and D. Boursier. 1978. *Petit dictionnaire Baka-Français*. Douala.
- Bundo, D. 2001. Social Relationship Embodied in Singing and Dancing Performances among the Baka, *African Study Monographs*, Suppl. 26: 85-101.
- 分藤大翼. 2001. 「バカ・ピグミーの加入儀礼ージェンギの秘密」澤田昌人編『アフリカ狩猟採集社会の世界観』京都精華大学創造研究所ライブラリー, 9-54.
- . 2005. 「木霊する森ーピグミーと精霊」『神奈川大学評論』51: 69-78.
- ダグラス, メアリー. 1983. 『象徴としての身体』江河徹ほか訳, 紀伊國屋書店.
- 原子令三. 1984. 「ムブティ・ピグミーの宗教的世界ーモリモとバケティ」伊谷純一郎・米山俊直編『アフリカ文化の研究』アカデミア出版会, 137-164.
- 林 耕次. 2000. 「カメルーン南東部バカ (Baka) の狩猟採集活動ーその実態と今日的意義」『人間文化』14: 27-38.
- Hewlett, B. 1996. Cultural Diversity among African Pygmies. In S. Kent ed., *Cultural Diversity among 20th Century Foragers*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.215-244.
- Higgins, K. 1985. Ritual and Symbol in Baka Life History, *Anthropology and Humanism Quarterly* 10 (4): 100-106.
- 廣松 渉. 1989. 「儀礼研究への方法論的前梯ー物象化論の視座から」田辺繁治編『人類学的認識の冒険ーイデオロギーとプラクティス』同文館, 177-222.
- 市川光雄. 1982. 『森の狩猟民』人文書院.
- . 1991. 「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, 11-34.
- Joiris, Daou V. 1993. How to Walk Side by Side with the Elephant: Baka Pygmy Hunting Rituals in Southern Cameroon. *Civilizations* 31 (1-2), *Melanges Pierre Salmon, vol.2: Histoire et ethnologie africaine*. Bruxelles: Institut de Sociologie de l'Université Libre de Bruxelles, pp. 51-81.
- . 1996. A Comparable Approach to Hunting Rituals among Baka. In S. Kent ed., *Cultural Diversity among 20th Century Foragers*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.245-275.
- . 1998. *La chasse, la chance, le chant: Aspects du système rituel des Baka du Cameroun*, Thèse présentée pour l'obtention du grade de docteur en sciences sociales, Université Libre de Bruxelles.
- Kitanishi, K. 2003. Cultivation by the Baka Hunter-Gatherers in the Tropical Rain Forest of Central Africa, *African Study Monographs*, Suppl. 28: 143-157.
- Lewis, J. 2002. *Forest Hunter-Gatherer and Their World: A Study of the Mbendjele Yaka Pygmies of Congo-Brazzaville and Their Secular and Religious Activities and Representations*, Doctoral dissertation,

University of London.

澤田昌人. 1991. 「エフェ・ピグミーの合唱におけるクライマックスへのプロセス—彼らが歌を愛する理由」 藤井知昭監修『環境と音楽』東京書籍, 135-168.

谷田部武男. 2000. 「地位-役割と社会構造」 碓井崧ほか編『社会学の理論』有斐閣, 44-58.

都留泰作. 1996. 「バカ・ピグミーの精霊儀礼」『アフリカ研究』49: 53-76.

———. 1998. 「カメルーン, 狩猟採集民バカの精霊パフォーマンス—とくに精霊のキャラクター表現についての考察」『動物考古学』10: 57-76.

ターンブル, コリン. 1976. 『森の民』藤川玄人訳, 筑摩書房.

ファン・ヘネップ, アルノルト. 1977. 『通過儀礼』秋山さと子・弥永信美訳, 思索社.

米山俊直. 1994. 「結社」 石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂, 249-250.

吉田憲司. 1992. 『仮面の森—アフリカ・チェワ社会における仮面結社, 憑霊, 邪術』講談社.

吉田憲司編. 1994. 『仮面は生きている』岩波書店.